現代俳句

にいがた

第13号

新潟県現代俳句協会

令和3年8月1日発行

風土を詠む

――第13号刊行に寄せて――

副会長　井澤秀峰

昨年に続き本年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から様々な対応に翻弄された一年であった。

不要不急の外出は自粛して欲しい、「三密」に留意して会議を持つようにと言われると、現代俳句協会の各種会合、句会等も軒並みに自粛に追い込まれてしまった。

そのような中で、井上弘美、若井新一両氏の句集が相次いで届いた。

「汀」主宰の井上弘美先生の第四句集「夜須礼」は、神代の時代から現代まで綿々と受け継がれてきた「神事」「祭」。そこに生きる人々の生き様、そこから生まれ育てられてきた美しい「季語」、京都の主な行事、産土を敬愛する思いで詠んでいる。

「香雨」同人の若井新一氏の第五句集「風雪」は、「新潟の豪雪地帯に生まれ、鍬の柄を握り、草刈機を背負い自然界と睦み合ってきた」（あとがき）作者だからこそ詠める風土詩であり句集である。作者はまた、帯で「農に生き、句作をたましいの糧とする。足裏を耕土の奥へ踏み込み、豪雪の地での、生と死を明滅させる。」と書かれている。

「新潟に生きる」といえば、新潟県内の仲間四人からの句集と一人の詩集も届いた。当会会員からは、司雪絵氏の「雪紐」。清水逍径氏の「海の懐」が上梓された。両氏は三条市の方であり、新潟の風土を詠まれている。特に逍径氏は本会の会長でもあり、「風土」から「地貌」への独自な世界を展開、発展させている。宮坂静生氏も、その「序文」で絶賛されている。雪絵、逍径両氏に大いなる敬意を表したい。

俳句に「中央」「地方」の区別はない。何処に住もうとも、それぞれの風土に根ざした「自然と人との心豊かな交響」こそが俳句を大きく勁くする。風土を詠むとは、生活を前提とした気候・自然・風物を愛しみ、たたえ、誇るべき風土に根ざして、日々新しく、己の生命を詠むことである。

目　次

現代俳句にいがた 第13号

巻頭言	井澤秀峰	1
旦暮集	会員作品（サ行先行）	2
秀句抄出（第12号より）	浅野朝女	17
	小熊千恵子	17
	大島めぐみ	18
	袖山リエ	18
	安澤静尾	19
通信句会報　第5回		20
第6回		22
第7回		25
第8回		27
第9回		30
物故会員		33
事務局短信		34
編集後記		35

表紙写真　山口冬人
旦暮集 文字・カット　八木進

表紙のことば

ＳＬばんえつ物語号　山口冬人

ＪＲ磐越西線新津駅と会津若松駅間を冬季除き週末や祝日に運行される。阿賀野川沿いに力強い汽笛が響き渡ります。

旦暮集

（五十音順サ行先行）

余り苗　新潟市　佐藤彬

菜園の今日もクァーと寒鴉
パンドラの箱や濁れる雪解川
山城の主の気分若葉風
豪快に窓を洗ひて更衣
片隅の殊に色濃き余り苗
大杉のかなづるごとし法師蝉
暮の秋ナウマン象のありし日を
春待つや五臓六腑の大欠伸

令和三年　新潟市　志田すずめ

白鳥の今着きしこえ暗闇に
独り身の息子に仔猫良夜かな
黒髪の白髪となり冬の音
稲積むや懐かし人が夢に来る
マカロンの快気祝いや二月尽
ミャンマーに流血の日々芝桜
戒名は「雅秀」となりし春の星
東京五輪コロナに揺れし朧月

春の女神　三条市　清水逍径

遠がすみ句集上梓の日の入院
春暁や目覚めてをるか癌此奴（手術の日）
春星の語りかけくる手術台
麻酔醒め春の女神か妻の声
わが腹に孔の三つ四つ春の宵
朧の夜ふと母許の雄物川
吾を抱く春の守門（すもん）岳の朝光は
山棟蛇病後の吾に退りけり

恋雀　三条市　清水美智子

火焔土器の炎の揺るるかと鮭颪
田の神のための褥か雪ねぶり
蛸・魚の雛も吊せり蜑の町
穴出たき熊や今年の雪の嵩
夫疾く癒えよ一閃の初燕
人住まぬ家に軒借る恋雀
弥彦嶺へ湖のごとしよ水張田は
茅花流し浜辺のカフェは人集め

彩雲　新潟市　菅原あや子

彩雲をくぐりて戻る小白鳥
雲ほぐれ海の匂の木の芽風
ものの芽や蔵解体の土埃
園児まだ午睡の刻や花万朶
水潜る豆腐平らに花水木
星はみな召されし天使原爆忌
大鱈裂く通し土間より怒涛音
ひとり言も生きて行く術初しぐれ

陶枕　新潟市　杉本憲治

春惜しむ越の汽笛を遠く聞き
花散ってしまへば海が見たくなり
田植機の蔭をくづして進みゆく
陶枕や眠りて己れ消す時間
巻たての録り石碑や落し文
八十二坂だまって過ぎし茄子の花
朴の葉の大きく落ちて音のなし
水掴みつかみて洗ふ赤かぶら

茱萸真っ赤　長岡市　袖山リヱ

梅三分村の空気が動き出す
遥拝ですます忌日や著莪の花
石切場に残る幻聴山若葉
銀河の尾へ恐竜の骨連なれり
風紋は風のことだま秋高し
人恋ふる色を虚空へ曼珠沙華
原発へ地続き五里の茱萸真っ赤
声明の和す百畳や白障子

夏木立　三条市　高井年子

夏木立夏の深さの先師の忌
止軒生家風かんばしき朴の花
ぼうたんやつかれのふかさ知るまひる
3・11忌黙しては慟哭の海
背信は未完の孤独草いきれ
コロナ禍の気のたるみなくくる立夏
山椒魚ぬつくりと山動くなり
直情の身の折れさうな青芒

応援歌　柏崎市　武本松久

踊り唄途切れる高齢者の気配
応援歌届く路地裏暑くなる
誤字多き祖母の手紙や麦の秋
コロナ禍や春待つ空の観覧車
ひと時は泣ける軍歌よ冷し酒
パレードの近づく気配水を打つ
洗はれて春ダイコンに肌の艶
水喧嘩果ては暮しの愚痴となる

花は葉に　柏崎市　田村美和子

果てしなき鎮魂の海春寒し
逢へずして姉は逝きたり花は葉に
来る筈のなき電話待つ日永かな
風通しよきは家風よ柿若葉
老鶯と声を交はせり畑の朝
孔雀鳴く夏がそんなに辛いのか
ワクチンの接種へ向かふレース着て
籠りゐて庭に咲かせり男郎花

陽の匂ひ　三条市　司雪絵

神苑の光をしぼる弓始
ほつれたる記憶繕ふ針始
花嫁となりし子の雛飾りをり
陽の匂ひ土の匂ひや菊根分
登高やおとぎの国のやうな街
止め石のをとこ結びや冬の蝶
霙傘閉ぢて署名のペンを取る
ブルーリボン胸に霜夜の集ひかな

春風　長岡市　中村侖

春風に背おされ畑に来たりけり
梅日和自粛と言へどそこらまで
白よりは赤い椿の潔よし
庭あれば庭の片地に黄水仙
入院の手続き済ませ南瓜蒔く
苗売場外へ広げて夏立ちぬ
けつまづき小さき筍掘る小径
花空木垣根越えしを切り花に

春泥　三条市　中村梨枝

春泥を跳んで眼鏡の外れをり
暑き日の壁画の天女抜け出せり
検温も旅仕度なり朝寒し
口の開くミイラの洩らす秋の声
接待の柿は四角よ佐渡遍路
陽当ればわれも発光照紅葉
この寒さ大声出して見たくなり
建売といふ墓群や落椿

九月　長岡市　成保房子

霧島つつじ風なきに散り風に散る
昭和の日何となく吹くハーモニカ
少年の髪触角となる夏よ
黙といふ会話もありぬ星月夜
包丁の音丸くなる九月かな
縄文人になりきつて割る胡桃かな
蓮根の穴通し来る寒さかな
うららけし乳歯一本のぞかする

白いコスモス　新潟市　成海静

好きな花は白いコスモス七七忌
静かなり遺影に秋の日が射して
空を見て決める一日秋深む
ひとり逝きまたひとり逝きひとりの冬
白鳥のこゑ真似てより風邪心地
冬青空鬱といふ字のバラバラに
冬梨の重さ言ひつつ剝いてをり
晴天や棚田に早苗ゆき渡り

桜隠し　糸魚川市　早津翠邦

ぽろぽろと小鳥降り来て寒固
花蜂の水をまろめて飛びゆけり
麦星を掬ひ取つたる穴杓子
秋蝶の風の切れ端つれて舞ふ
千社札頑固に古び泡立草
冬濤の真つ直ぐに立つとき碧し
神籤結びぬ元朝の蒼き空
弔ひや桜隠しを従へて

榛の花　新潟市　長谷川みきこ

根の国の下駄鳴る音か仏の座
村人の去りし里山遅桜
榛の花音の明るき五頭山の水
チューリップ長き手足の転校生
豆ごはん一行日記に佳き知らせ
処置室の赤子大泣き山椒の実
星月夜研究棟にひとつの灯
冬深し須恵にうねる火の気配

槙槭の実　糸魚川市　平野博之

麻酔覚めこの世はいびつ槙槭の実
牛つなぐ石もろもろや冬籠り
時雨忌や日々のくらしの変りなし
序列なぞなし生き様や鉄線花
雪解靄ついに更地よ浜御殿
植田水小さな命輝けり
今生のかぎりの声や雨蛙
羅漢さま青鬼灯に目もくれず

更衣　長岡市　藤沢潮子

音階のシャープフラット木々芽吹く
夕暮れのぶらんこ風の子が遊ぶ
洗ふほど馴染む木綿や更衣
夏休昆虫図鑑から羽音
下校児に手洗ひうがひ鵙高音
夕月を揺らして洗ふ鍬の泥
はるかなるものに猟犬耳を立て
女正月夫を待たせてゐて試着

名残雪　新潟市　藤田隆雄

君子蘭カフェのテラスに器量猫
春立つやスポーツ欄から目を通す
チョコレート買ってはみたが三日過ぐ
名残雪十八番線今は無く
朝刊の視点そらす初音かな
木曽駒の嘶き消えし夏野かな
懐へ金亀子の逃げ込みぬ
碁仇の示しあわせの白絣

遠き日　妙高市　古川よし秋

芒種の朝日に洗ふ鍋の煤
捩花を跨ぎて妻を呼び戻す
夏鴨に田を植うるまで田を貸しぬ
遠き日の肩書うすし藍浴衣
新緑の陰のゆらぎや山しづか
田植終へ一升の瓶のまはし酒
障子貼るあの日あの時母の胼胝
青田風畦に分け合ふコッペパン

桜かくし　糸魚川市　保坂季泉

わが齢に我のおどろき初詣
寒念仏の声聞きたればよく眠れ
虎落笛どの闇通り抜けきたる
何もかも忘れてよろし涅槃雪
雪害あと桜かくしの待たれをり
春ショール長くなりたる立ち話
春菜漬忌日の膳に色を添へ
葉桜や気合抜けたる心地して

夕端居　柏崎市　星野祐子

啓蟄や小さき花壇のレイアウト
行先はハンドル任せ春うらら
薫風や電車見に行くベビーカー
愛用の傘低くさす青嵐
日記兼家計簿開く蚊遣香
父と娘の会話を外れ夕端居
実印に父の威厳や秋深む
余所見する子の皿に増ゆ冬苺

天地の子　阿賀野市　柾木幸子

田野こそ吾が学び舎よ雨蛙
首突き出し突き出し歩む白鷺
雁渡し鬼蓮の実の棘鋭
秋の灯や闇を寄せくる波の音
天地の子なり雪掻く日を積める
木末まで張りつめてゐる冬木かな
火のごとく入り日揺れをる雪解の田
全身が春の受信機土ほぐす

憂国忌　柏崎市　水野宗子

初市を折り返すより流人めく
全身がバネ少年に寒明くる
カザルスの音色ゆるやか春暖炉
人拒む半跏趺坐なり蟾蜍
水旨きこの地より出ず新豆腐
切れさうな朝の青空憂国忌
寺宝てふ木乃伊を覗く寒さかな
真うしろに海寄鍋の火に仕へ

寒柝　糸魚川市　八木進

メビウスの輪を抜けられず亀の鳴く
夕東風やノラとなりたる猫帰る
ラムネ玉カランとみんなゐなくなり
赤翡翠水伯を恋ひ鳴きわたる
秋しぐれ脚下照顧の靴二足
アマゾンの箱来る数へ日の日暮
潜り門鬼に開け置く節分会
風読みて出る寒柝のこども組

半夏生　阿賀町　山口冬人

村の火が消えて葛の香強くなる
弾力の利かぬ脳みそ半夏生
耳鳴りも加へ今日から蝉しぐれ
小鳥来るドロップの缶に少女の絵
小鳥来る大きな窓が母の部屋
山眠る昭和を詰めし古箪笥
しつかりと雪踏み神の道とする
雪を掻く土の匂ひの嗅げるまで

広島忌　糸魚川市　山田一風

土に滲む雨を見てゐる広島忌
青天へならべて干せる軒つらら
着ぶくれて手足みじかくなりにけり
降る雪や熊もましらもその中に
まぶしさは刃物に似たり寒の水
日の差して畳一枚分の春
一斤のパンの丸みや春立ちぬ
啓蟄や大地胎動をさまらず

五月　上越市　横山淑

藤垂れて紫の闇作りけり
花水木ふだんの町の明るくて
郵便局に山菜もある五月かな
遠まわりして今日も又牡丹みる
妙高山にはね馬見ゆる五月くる
芍薬を生けて一と間の華やげる
川音の高まりてくる風五月
葉ざくらの並木を走る若人ら

明日へ　長岡市　吉川さが子

待ち針の色のとりどり春の雪
啓蟄や何かたりない誕生日
3・11吾はひたすら縄を解く
木の根明く鴉首より歩き出す
別れ際落花一片拾ひけり
明日へと続く若葉の公孫樹
蜘蛛の囲の雨粒ゆれる重さかな
茄子百本植ゑて漢は腕を組む

裾濃の茜　新潟市　米岡幸子

五体投地したくなるよな雪の嵩
風花や捨てきれぬもの身ほとりに
四月馬鹿自分の背中よく見えぬ
行けなかった切符小箱に春の逝く
前書も後書もなし罌粟坊主
ひとときのきらめきに賭け梅雨の蝶
鈍感と言われる平和やいと花
夕焼や裾濃の茜恋に似て

雪の底　長岡市　米山節子

てんでんに寄りて始まる堰普請
きんぬぎ団子屋敷蛇にも献りけり
いなつるび農の心根夫に見る
つづれさせ土の力のある暮し
取り易きやうに痩葱囲ひ置く
山は雪打豆にふと野風の香
雪は駄駄っ児てこずるも根の真白
高干しの軍手が二対雪の底

鈍色の空　長岡市　渡辺真帆

合格子上衣忘れて帰りけり
少年の軽き鬱屈リラ冷えに
炎天や襤褸で越えし老爺嶺（中国東北部）
西瓜売りに子と換へぬかと言はれし日
目覚めよきことが吉日青木の実
湯たんぽに甘えて少しづつ落伍
春一番赤いバケツに躓けり
鵠（くぐひ）帰る鈍色の空彫るごとく

春麗ら　柏崎市　浅野朝女

意に添はぬ風もあらうに山笑ふ
老いるとは馬鹿になりきること麗ら
旧カナは忘却の海へ春うらら
田植して地球半分青くする
万歩計山の緑に拉致さるる
藤の花幔幕にして道祖神
痩せ土筆家の跡地のひとにぎり
引き算の人生いつぱい薔薇ひらく

私は林檎　長岡市　有栖川蘭子

水温む太鼓サークル練習日
芍薬の珠開かずに果てにけり
髪切（かみきり）虫のいる無人駅地下通路
冬銀河近くに止まる救急車
林檎穫る魂をもぎとる如く
また一軒更地となれる寒さかな
女から獣のにおい建国日
朝寝して毒吐く力戻りけり

白鳥帰る　新潟市　安澤静尾

黙しても卓の明るし恵方巻
塩鮭の主役の頃あり歳の市
白鳥の帰る日の空美しきかな
採り置きの葱立ち上る春の納屋
大根の花咲くつづき良寛堂
アカシアの香の道行けばトドの声
訪ね来し声懐しき桐の花
梅を挽ぐ脚立より見し船の跡

野ばらの実　妙高市　井澤秀峰

去年今年吾に慙愧の日々ありて
雪間草里の記憶の重くあり
雨あとの鬼哭啾啾雪濁り
一つとは無数のはじめ蟻の道
霍乱や眠りの浅き看護婦ら
錨泊の船へと南風尖りくる
野ばらの実未明の童話読み直す
蜩や句点を確と打ち終る

薔薇光る　新潟市　石川冨美子

薔薇光るその辺りまで歩きたし
残り鴨いまリハビリの途中です
密さける世に郁子の花密に咲く
弟と見し城址のさくらかな
九十の次の百までさくら咲く
足らざるは人の声なり風薫る
夢の中別のむかしが夕焼す
ゆっくりと歩めど何時か着く花野

豪雪禍　上越市　石黒英進

倒木が電線を断つ雪恐怖
電線が断たる暗がり雪あかり
明け暮れの除雪や哭きて樹木折れ
音断ちし深雪の古刹黙座あり
清貧の湯タンポに足夜の至福
折れ倒る樹に竹が混む後仕舞
折れ乱る雪禍の竹に良き思索
必ずや来る雪の果伽藍守り

新樹光　新潟市　石塚しをり

仄白きチューリップ家で過ごす日
新樹光還暦のページをめくる
初燕風と交わり人と交わる
芽かき済む川すれすれに夏燕
リモートの初顔合わせ水中花
お風呂場の天井磨く小鳥来る
いく筋の洩れくる陽射し秋惜しむ
父母にそれぞれの恋シクラメン

山桜　長岡市　石塚吉江

草笛を吹く少年の虚空かな
七変化をとこの小買ひ頭陀袋
山栗や音の重さに日の暮るる
故郷は薪たかだかと冬隣
すれ違ふマフラー風を翻す
雪しんしん方舟一村浮かしをり
雪囲とる心解くかに解かれたり
雨紡ぎ風をほぐして山桜

日だまり　長岡市　伊藤一二三

老いて行く豊かな時間花すすき
おしくらまんぢゅう疎ましき密なれど
曇天の奥に日だまり寒卵
淡雪や昨日の人に長電話
風光る一角に朝市の街
人ごみに出かけたき日よ鳥曇
暖かし池の周りを一時間
藤咲いて庫裏より入る茶懐石

若葉萠ゆ　新発田市　伊藤亨子

大雪と世のしがらみをマスクして
春立ちぬ捨てるもの多き齢かな
墓守りをどれだけ出来る初笑い
倫理とや風やわらかに木の芽出で
菜の花やおぼろは涙もろくする
逃げ水追う追っても老はついてくる
未曽有の災いものとも若葉萠ゆ

鳥雲に　糸魚川市　猪又秀子

蕉翁の転びし川の猫柳
目印は酒の看板底雪崩
四面のコート遊び場鴉の子
幣を受く区長班長海開き
鳥雲に入りて切株残りをり
障子貼る裏と表にある時空
土踏まずあるスリッパー暮の秋
手渡しの回覧湿る十二月

衣脱ぎ　長岡市　今井愛子

酒醸す耳の気配り寒燈下
せせらぎは母懐水芭蕉
荒梅雨や水分過多の日本地図
衣脱ぎや仏と老いの骨休み
蓑虫と良寛風の成すままに
秋日濃し胸乳誇示するミス土偶
榾火美し闇の余白が言葉生み
冬天の薄日を煽る箕の忙し

けふの月　新潟市　梅田知子

山あひの朱の鉄橋や木の根明く
珈琲に渦巻くミルク春怒涛
無言館出るや虚空へつばくらめ
さりながら心解かざる夕桜
青嵐ロボットのごと歩きたし
天上に佳き人多し終戦日
焼き上がるベーグルの香や今朝の秋
ナイル川の橋架くる夫けふの月

春の土　新発田市　大久保窓子

一本の杭を住みかに蜻の道
時差惚や水の足りない時計草
広き田の美貌に座り代掻機
満ち潮の空瓶春の浮き心地
球根のふうと息吐く春の土
栗落ちる間引かれてゆく齢
夏大根引く思わざる反抗
木訥な筍きれいに剝いてやる

師の一句

新潟市　大島めぐみ

開講のやる氣漲る新入生
老梅の芽吹く力のゆるぎなき
追憶にひたる一と刻雛と座す
あのこともこのこともいま桜の季
人影は釣人らしき海は夏
夕東風の暖簾をくぐる小町かな
春昼や心の眼うしなわず
亀鳴くや思い出すのは師の一句

薫風

見附市　太田チエ子

薫風や丸々戦後生き抜きぬ
初夏や妙高山を降りる風
街路樹の菜のきらきらと夏に入る
図書館へ若葉の風に背を押され
牡丹咲く富貴に遠く世を生きぬ
空襲も地震も潜り抜けし雛
田の水のゆらめき止まず風薫る
人はみな故人の顔や春の夢

早苗田

長岡市　小川久子

早苗田に映ゆる朝日も白雲も
介護して介護をされて四月馬鹿
梅雨蝶の真白く止る草の先
順調にものを忘れて花は葉に
昼寝より覚めて飲みけり力水
銀河濃し天に逢ひたき人ふえて
治るといふ夢あり茅の輪潜りたる
水澄むや湖底の村の見ゆるまで

春の音

長岡市　小熊千恵子

眉を引く鏡の奥を止まぬ雪
寒茜惜しむ間もなく消えにけり
人のみの地球にあらず地虫出づ
名水を入れポリタンク春の音
草を引く孤独の良さを知り初めて
滝音は民の慟哭廃村碑
花野へは言葉の要らぬ友とならも
もしかして今の呼鈴鬼やんま

転生の夫

長岡市　長部多香子

転生の夫のこゑかも小鳥来る
風だけが棲みつく村や年の暮
推敲に崩るる一句春浅し
鶏頭のひだの奥より暮れゆけり
自分史は昭和に戻り走馬灯
短夜の端にまどろむ看取妻
子を叱りきれぬ教師の日焼顔
炉火恋し祖父がきせるを三度打つ

夏霞

長岡市　風間靖彦

夏霞佐渡は浮島かも知れぬ
山門の涼しさにいて無信心
かなかなや放り出されてランドセル
限りある生命ふくらむ虫の闇
落葉舞う輪廻転生限りなし
吊り下げし鮭の眼窩に闇迫る
ほっこりと陽に坐りたる福寿草
囀れば魚板かすかに呼応せり

天地の子

新潟市　刈田光児

しゃぼん玉飛ばす子追う子天地の子
リラの花下校する子等リラックス
鳥帰る空まるのみに肺活量
雲雀野の真中に青き指定席
踵から歓喜のいずみ青き踏み
伝えたき風の青芦前へ前へ
約束の木に約束のみんみん蟬
牛蛙許容範囲に啼きなさい

雪

新潟市　北村美都子

雪暗や河口に途絶え街の音
姿見の奥のあおあお雪が来る
子狐のおはなし小米雪ささささ
生月はまた永逝のとき立花
縄文の雪とよもせる火焔土器
子規の句の雪の深さとなりにけり
ゆきやまに稜線われに心電図
病み抜きし頬剃られおり牡丹雪

晩春の潮騒　糸魚川市　倉又紫水

晩春の潮騒人が話すごと
芍薬の蕾ふくらみ風に揺る
薫風や昭和一桁令和に生く
朝に咲き夕べに閉ざす木槿花
期待せしスーパームーンは雲の中
新コロナ日本列島を席巻す
シャボン玉親子で空を見上げおり
人流と言いし語りに世の流れ

田海ヶ池吟行　糸魚川市　黒坂愛子

湖までをそぞろ歩きの姫女苑
山藤のしたゝる湖の静寂かな
望湖台落し文手に談笑す
真菰ゆれ弧を描くものぞ何かゐる
真菰食む大鯉とつじょ腹を見せ
湖に揺れたる咲きがけの朴の花
帰り際湖に消え入る黒揚羽
雪渓の間近に見ゆる所まで

姉の文　三条市　小林悦子

ハート型の土偶もありて暖かし
春深く老いの兆せる孔雀かな
失言に鬱々として沈丁花
門灯はセンサーで点き春の宵
葉桜やすこし曲がりて姉の文
桐の花はらからの又ひとり欠け
消すに惜しき板書の文字や新樹光
雨上がり植田の風のさみどりに

土鈴雛　柏崎市　近藤美好

最初はグー土手を押し明けつくしんぼ
一枚脱ぎ腰に結びて青き踏む
野遊びやリュックの鈴も歌ってる
旗を立て実習田の耕し日
パソコンもメールも出来ず賀状書く
雪晴れやペン画のごとき雑木林
土鈴雛振れば昭和の音さびて
城一つ逆さに沈め陽炎へる

秀句抄（第12号より）

浅野　朝女選（2～5頁）

狭き庭不満顔に土筆んぼ　風間　綾子
上を向く蛇口に夏のたちにけり　風間　靖彦
還らざる時間の彼方や秋夕日　金井　芳夫
黙祷の距離感近き冬銀河　刈田　光児
嫁無くも庭に色付く柿甘し　神林　長一
寒の海黒みを帯ぶる息づかひ　日馬　のぶ
夏の日の新型コロナにテレビ番　倉又　紫水
吾子と鳴らす平和の鐘や鰯雲　黒坂　愛子
花の山誰彼となく挨拶す　小林　悦子
蕾みな祈りのかたち聖五月　小林　博子

冬銀河その奥に詩を汲みにゆく　北村美都子

宮沢賢治の銀河鉄道の夜を思い浮かべ「本当の幸せとは何か」を探りながら、亡き人を追悼し、郷愁を感じている美しい句だと思います。

燕来る生まれた家は現住所　近藤　美好

巣を置き去りにしていった燕が今年も又帰って来た、生まれた家を忘れずに。人間の子供は都会へ就職すると仲々帰って来ない、母を一人残して。

ひつそりと片葉の葦や叢時雨　佐藤　彬

嘗って越後七不思議巡りで片葉の葦を尋ねていった事があるが、今はコロナで誰も行けない。片葉の葦も淋しがっていると思う。叢時雨がよい。

小熊千恵子選（6～8頁）

野に在りしときよりも濃く薺粥　真貝　葉月
高みより母の呼ぶ声さくらさくら　菅原あや子
暮るるまで海みて閉めし雛の間　杉本　憲治
明易し船を迎へに漁師妻　袖山　リヱ
黒葡萄熟す日の湖月の湖　高井　年子
庭先の余白に花の種を蒔く　武本　松久
野菜屑厨に溜まる年用意　田辺　一也
コロナへの絶縁状や落し文　田村美和子
諍ひし子の靴磨く星月夜　司　雪絵
蕗の薹あると思へば在りにけり　土屋　信之
さくらさくら大鯉ゆらりゆらりかな　中村　梨枝
アフガンに水の耀ふ寒月下　清水　逍径
木の根明く水はどどつと四方の田へ　清水美智子

常の顔へ常の手順の初化粧　真貝　葉月

正にその通り。忙しい元朝の主婦は、時間をかけて丁寧に化粧等はしておられません。常の手順でさっと化粧をするだけで精一杯です。

獅子頭冠れば獅子の呼吸せり　袖山　リヱ

置かれている獅子頭を人が冠った途端に、獅子に命が宿ったかのような動きをします。「呼吸せり」とは正に言い得て妙。

ひと駅は菊の香も乗る在来線　武本　松久

在来線ならではの句。小さな駅のホームの片隅に菊が咲いていたのでしょうか、それとも菊の花を抱えた人が乗って来たのでしょうか。

大島めぐみ選（8～11頁）

三ヶ所を巡る車窓の花見かな　中村　侖
女学生になりきり母が初夢に　成保　房子
柿の花父へ短かき手紙書く　成海　静
身ほとりに明りの欲しき冬りんご　長谷川みきこ
クレヨンの匂ひを畳む卒園児　早津　翠邦
大根のあばたも笑窪地の歪み　平野　博之
初蝶の番地訪ねるやう行き来　藤沢　潮子
朝刊の視点をそらす初音かな　藤田　隆雄
風薫る俳句手帳の付録かな　古川よし秋
足元のおぼつかなき子初浴衣　保坂　季泉
夏草や空家空畑無住寺　星野　祐子
舞うという趣きのこし枯葉地に　本間　道
湖埋むる白鳥夜の仄白き　柾木　幸子

山清水運命線に掬ふかな　古川よし秋

山歩きの好きな作者であろう。途中、立止まりごくんと飲んだ。自分の掌で口元に、疲労回復。中七が絶妙で人間の生命力まで感じられる。

青柿や羨ましきは子沢山　保坂　季泉

コロナ禍でも柿は沢山の実を付けてくれた。樹木には無関係なのか、日本は人口減少で先が案じられる。昭和時代が懐かしく兄弟愛も一入。

采配は母の口先年用意　星野　祐子

私の嫁いだ頃は二世代で暮らすのは当り前、総て義母に教わりお正月を迎えました。情感あふるる句で、あの頃が甦りました。

袖山　リヱ進選（12～15頁）

液晶の指紋拭き取り台風裡　水野　宗子
滝落ちて叩く壺中に天のあり　八木　進
寒満月ひとりは米を磨いでをり　山田　一風
雪虫の舞ふ一点や空の青　横山　淑子
閏日の是好日の牡丹の芽　吉川さが子
散紅葉パズルのピースかき集む　米岡　幸子

豆幹の爆ぜ魁よどんど闌く　米山　節子
北風荒武者のごと樅一樹　渡辺　真帆
キーン師眠るいま大輪の薔薇咲かせ　浅野　朝女
初凪やどこまで延びる生命線　石川冨美子

黄たんぽぽ月と気球は兄弟か　山口　冬人

地の黄たんぽぽから宙への飛躍、月と地球を同類と捉え兄弟かと投げかける感性愉しい一面も感じられて、発想の転換が見事な作者と思う。

都恋ふ隠岐の島唄鳥渡る　安澤　静尾

後鳥羽上皇の配流の愁嘆と心情を詠まれた句に感銘。火葬後は都に分骨されたと聞く、今年は遷幸より八百年の節目にふさわしく偲ぶ作者とも。

新地図に生家の消ゆる溽暑かな　井澤　秀峰

少子化の進む現代世相の一齣を現していると理解。中七の措辞の取り合せの溽暑にやりきれなさと寂しさを共感しました。

安澤　静尾選（15～18頁）

雨水過ぐ日々躊躇なき嬰の動き　石黒　英進
感染死者戦死者のごと桜満つ　石塚しをり
雪降りて郷の暮らしの定まれり　伊藤一二三
令和の灯アガパンサスの青い火よ　伊藤　亨子
足場組み外壁工事原爆忌　猪又　秀子
泡立草老死は泡に似てかるく　大久保窓子
亀鳴くやあてのなき日を深椅子に　大島めぐみ
筍をただの一打でしとめたり　太田チエ子
木々芽吹く風に微熱のあるやうな　小川　久子
雨一夜歯切れよく晴れ新樹光　長部多香子

青墨をぽとりと散らす春隣　石塚　吉江

硯の墨をたっぷり含ませ、うかりと白紙に落としたその滴のひろがりが春を呼ぶような温みがあった感覚的な一句。

猪独活の花や津波の避難坂　今井　愛子

トゲの多い雑草の独活、東日本の津波の犠牲の子の判断力で、助かった子、亡くなった子と瞬時に見た光景。納得のある一句。

秋草や在来線の音が好き　小熊千恵子

新幹線の時代に今又鉄写らが流行っている。全てがスピードの時代にゆっくりの音も大切。秋草の措辞が効いている。

通信句会報

■第5回句会

順位	得点	作品	作者
①	18	夕焼けの佐渡を引っぱる地引網	成保房子
②	17	風の筋よく見えるらし鬼やんま	風間靖彦
③	14	紙魚の書や傍線若き日のわたし	渡辺真帆
③	14	すぐ泣かれ赤子汗ごと返しけり	水野宗子
⑤	13	電柱に出水の記録大西日	司　雪絵
⑥	12	遠佐渡のけふよく晴れて梅を挽ぐ	安澤静尾
⑥	12	中干しに根付く越後の田が青し	安澤静尾
⑧	10	青嵐欅大樹が四股を踏む	藤沢潮子
⑧	10	炎天を鎮め古刹の深廂	風間靖彦
⑧	10	履き慣れし靴の片減り半夏生	山田一風
⑪	9	朽ちる木も森のアートや青嵐	水野宗子
⑪	9	鎌寝かせひとりの木蔭苔の花	古川よし秋
⑬	8	脱稿や西日の影の濃くなれり	井澤秀峰
⑬	8	弾力の利かぬ脳みそ半夏生	山口冬人
⑬	8	胸広き男が夏をつれて来し	大久保窓子
⑬	8	人嫌ひの半跏趺坐なる蟾蜍	水野宗子
⑬	8	傘雨の忌雨の匂ひを持ち帰る	八木　進
⑱	7	茄子漬の三日の色や農に生く	古川よし秋
⑱	7	村の火が消えて葛の香強くなる	山口冬人
⑱	7	昼寝覚め起きぬけに飲む力水	小川久子
⑱	7	アナログで足りたる暮し甚平着て	渡辺真帆
⑱	7	梅雨濡れのまなこが澄みし牧の牛	石黒英進
	6	氾濫の日本国にて梅漬ける	伊藤亨子
	6	佳き風の森をひきしめ時鳥	石黒英進
	6	長生きは病と対峙今年竹	中村梨枝
	5	逝く人を看れぬ日々や梅雨寒し	中村　侖
	5	山峡に残る伏屋の青胡桃	石塚吉江
	5	獄門跡の精霊飛べよ草蛍	袖山リエ
	5	静寂打ち森青蛙孵り継ぐ	米山節子
	5	滝いつも生れたてなるよひかりの子	清水美智子
	5	わが望み程の細さよ如露の虹	長部多香子
	5	葭切やふくらみきって分水路	清水美智子
	4	梅雨晴間ロマンあふるる古書店へ	大島めぐみ
	4	雷鳴に吹き飛ばされし口喧嘩	星野祐子
	4	楸邨忌ひともひとりを追ふ兜太	早津翠邦
	4	物の怪のひそむ気配や木下闇	山田一風
	4	取り立てて用のなき日や夕端居	星野祐子
	4	ねぢばなや一途は母の性なれば	司　雪絵
	4	オンオフのはざまにゆれて夏休み	佐藤　彬
	4	降らず照らず天の無気力梅雨の昼	成保房子
	4	友癒えよ枇杷の色づきはじめたる	小林悦子
	4	素潜りの漢の昼寝無重力	袖山リエ

	4	白絣着れば自ずと風生まる	風間靖彦
	4	足湯する知らぬ同士や若葉風	田村美和子
	4	子の描きし合歓の花抱き母逝きぬ	成保房子
	4	記念樹に老斑の浮き梅雨の蝶	小林悦子
	4	文字摺草離れて二本ねぢれをり	猪又秀子
	3	老ゆるほどに愛を深めて日日草	田村美和子
	3	若葉風百萬遍の数珠を繰る	菅原あや子
	3	風死して猿にもありぬ口喧嘩	吉川さが子
	3	晩年へいざなう夏至の漢字辞書	石黒英進
	3	仮名文字つづりて鮎を串ざしに	大久保窓子
	3	亡骸はまだ表札に風薫る	石塚吉江
	3	透明の大皿に盛る夏料理	古川よし秋
	3	幕切れはやがて儚し夏越かな	大島めぐみ
	3	囲を張って悠悠自適女郎蜘蛛	米山節子
	3	何告げに来しか糸垂れ夜の蜘蛛	藤沢潮子
	3	父の日の箪笥の奥に男帯	安澤静尾
	3	畑に蛇声にはならぬ声発す	吉川さが子
	3	青嵐些細なことに長電話	星野祐子
	3	束の間の恋の夢見る籐寝椅子	武本松久
	3	梅雨出水わが上流に上高地	清水逍径
	3	夏ゆくや数多あまたを押し流し	山田一風
	2	かっこうが来て俳号で鳴き交す	長部多香子
	2	梅雨晴れの佐渡くつきりと威を正す	小熊千恵子
	2	眼帯の下向き歩く夏帽子	中村梨枝
	2	梅雨永き微分積分は難問	刈田光児
	2	夕焼や高みに鴉低きに吾	柾木幸子
	2	万緑や嶺々より生まる弥陀の風	菅原あや子
	2	故郷の空の青さも更衣	中村　侖
	2	しなやかに油断も隙も無き踊	武本松久
	2	頭から鮎食みさてと句を作る	小熊千恵子
	2	不揃ひの昭和の孤愁医者いらず	早津翠邦
	2	朝凪や水平線に巨船置く	菅原あや子
	2	七変化をとこの小買ひ頭陀袋	石塚吉江
	2	夏落葉痩せたと医者に褒められし	山口冬人
	2	ズッキーニ・パプリカの艶腕が鳴る	渡辺真帆
	2	片陰の反対側は朦朧体	刈田光児
	2	鐙坂は蕎麦屋の名なり立葵	司　雪絵
	1	櫻桃を含みし舌の愉悦かな	大久保窓子
	1	流螢や空近き地は闇深く	柾木幸子
	1	潮の香の茅の輪くぐりし海のいろ	八木　進
	1	処置済みの奥歯の痛む栗の花	小林悦子
	1	青柿やいつの間にやら子沢山	保坂季泉
	1	わが主治医七夕竹を裏門に	早津翠邦
	1	軒先にホースのとぐろ夏の雲	藤沢潮子
	1	人生はいつもバラ色山笑ふ	田村美和子
	1	短夜をうたた寝しては埋め合はす	小熊千恵子
	1	葭切の声ちりぢりに洗堰	清水逍径
	1	托卵の慈悲心鳥やウイルス禍	刈田光児

1 青胡桃葉越しに見えて磨崖佛　井澤秀峰
1 やかんごと麦茶を井戸へ寺の湯屋　長谷川みきこ
1 木下闇来て数珠掛けの六地蔵　猪又秀子
1 蛍どぶ古代文字描く世におりぬ　伊藤亨子
1 夕凪やほのぼのと笑む道祖神　八木　進
1 老いの夢いつかは叶う星祭　大島めぐみ
1 夏帽子去年の匂ひ残りけり　長部多香子
1 うこぎ摘み薬膳料理と長らえぬ　伊藤亨子
1 釣舟の還らぬ海を夏の蝶　袖山リエ
1 書道塾帰りに貰ふさくらんぼ　清水美智子
1 ランドセルは押入れの奥夏休み　米山節子
青嵐雀二三羽こぼれ落つ　小川久子
振り向けば迫る写生子青岬　武本松久
ぼんぼんぼんおばけめざむる夏の夜　佐藤　彬
霊泉飲む腹みず色にコロナ絶ち　今井愛子
元気なき夫に戸惑ふ初茄子　猪又秀子
三尺寝土にくひいる手足かな　長谷川美紀子
コロナ菌拒み家内の黴ふやし　清水逍径
日食のはじまってゐる今日は夏至　吉川さが子
成りすぎの胡瓜や腕の見せどころ　保坂季泉
浜の墓地西方浄土や夏落暉　今井愛子
カレンダー七月に替え眼に注射　中村梨枝
木陰停めシルバーマークは昼寝かな　中村　侖
羽越水害の古びぬ碑文胸を突く　柾木幸子
週末は家族がそろひ鰻喰ふ　小川久子
父祖守りの盆花育て嫁づとめ　今井愛子
荒梅雨や石垣崩るる岡城址　佐藤　彬
梅雨篭り体温計は離さざる　保坂季泉
山湖今風も絶えて水鶏鳴く　井澤秀峰
ひるがほや低きへ眼乳母車　長谷川みきこ

■第6回句会

順位	得点	作品	作者
①	17	八月十五日仏間に海の風入れて	八木　進
②	16	誰れも来ぬ盆の座敷の広さかな	吉川さが子
③	15	風紋は風のことだま秋高し	袖山リエ
④	14	行く夏の流木といふ忘れ物	成保房子
⑤	13	夏休み昆虫図鑑から羽音	藤沢潮子
⑤	13	土に滲む雨を見てゐる広島忌	山田一風
⑦	12	子を叱りきれぬ教師の日焼顔	長部多香子
⑧	11	短夜の端にまどろむ看取妻	長部多香子
⑧	11	語るたび深まる傷や敗戦忌	柾木幸子
⑩	10	墓洗ふ七父の背流せしことも無く	真貝葉月
⑩	10	秋没日残光ペンの先にあり	井澤秀峰
⑫	9	水底に陽が皺くちゃに秋の風	風間靖彦
⑫	9	瞽女唄は魂のこゑ夜の秋	司　雪絵

⑭ 8 捨てがたき洗ひざらしの夏のシャツ　星野祐子
⑭ 8 夜の孤独少し艶もつ虫の闇　石黒英進
⑭ 8 塔頭の門に龍ゐる秋の水　清水逍径
⑰ 7 何は無くとも父母の居り盆帰省　水野宗子
⑰ 7 虫干の四つ身かすかに子の匂ひ　藤沢潮子
6 広島忌水が水色つくれぬと　成保房子
6 鶏頭の闘ふさまに向き合へり　早津翠邦
6 言葉とは心の姿終戦日　小川久子
6 水こだま螢袋に治まりぬ　清水逍径
6 パンパンと夏の陽打ちて干すシーツ　小熊千恵子
6 ノーモア・ヒロシマ夏蝶は低く飛ぶ　山口冬人
6 椋の群呑んで鎮もる夜の大樹　風間靖彦
6 立ちしまま睡る馬なり走り星　石塚吉江
6 ラムネ玉からんと子らは帰りけり　八木　進
6 夏帽子母は百までもう少し　山口冬人
6 一夏の記憶を廻す万華鏡　成保房子
5 錠剤の押して飛び出す晩夏かな　古川よし秋
5 盆提灯死後には逢える人あまた　米岡幸子
5 平積みの本の崩るる残暑かな　渡辺真帆
5 星涼しアルプホルンの余韻かな　田村美和子
5 点呼とる声も日焼の鬼コーチ　小熊千恵子
4 海老反りに投網を絞る裸かな　古川よし秋
4 夏逝くや球児は時を跪きをり　今井愛子
4 若冲の群鶏図夏旺んなり　小林悦子
4 本流をそれて他力の旱川　早津翠邦
4 俳諧は生きる手段や涼新た　小川久子
4 送り出し老いの笑顔や酔芙蓉　安澤静尾
4 暑き日を生き魚のごと水を飲み　石黒英進
4 籠り居のその先見えず土用波　水野宗子
4 祭なき神の吐息や雲湧きぬ　今井愛子
4 笹百合や声の清しき三姉妹　中村　侖
3 生かされて七十五年終戦日　中村梨枝
3 鰻食む断捨離等は子に委ね　小熊千恵子
3 友の手術了りしころや赤蜻蛉　安澤静尾
3 忘却の流れにふんばる水馬　大久保窓子
3 穴太積石垣めぐる盆の月　司　雪絵
3 海涼し残照惜しむたらひ舟　田村美和子
3 秋の風ここはシルバー通りかな　石塚吉江
3 夏負けて見る影のなき風化仏　猪又秀子
3 畑隅にフェアリー生れて茗荷の花　柾木幸子
3 去ぬ燕両手を振ってしまひけり　米山節子
3 軍服の写真はちちよ終戦日　中村梨枝
3 爪につく畑土落し墓参り　中村　侖
3 木漏れ日や溺死の妹の墓洗ふ　武本松久
3 恵古筵むかし宿場の村寂し　八木　進
3 踵おとし体操烏瓜の花　小林悦子
3 雨欲す首の重たきおいらん草　伊藤亨子
3 鍛冶の火のごと燃えつづくサルビアは　清水逍径

3 新涼や墓石彫る音石に沁む　袖山リェ
3 綿菅の尾瀬よ便りのなき友よ　司　雪絵
3 当て所なき宙をまさぐる鉄線花　菅原あや子
3 帰省子の畳座敷が空いてをり　山田一風
3 半夏生素敵な髪の母おりぬ　伊藤亨子
2 鬱とばす向日葵のみなこちら向き　米岡幸子
2 新涼の風を紡ぎて白紬　袖山リェ
2 週一の畑に出くはす塩蜻蛉　佐藤　彬
2 縦の樹皮龍の鱗か炎暑なり　今井愛子
2 牛蛙許容範囲に啼きなさい　刈田光児
2 睡りへと地神設ふ虫の闇　米山節子
2 約束の木に約束のみんみん蝉　刈田光児
2 時の気に負けぬ十薬干し拡ぐ　米山節子
2 手の届かぬ後ろボタンや秋の蟬　小林悦子
2 人の世の傲慢へ示唆コロナ残暑　大島めぐみ
2 バーベキューの焦げに噎せ返ふ稲雀　猪又秀子
1 断崖の百合に潮風弥彦山　中村　侖
1 楓涼し言の葉磨き詩にせん　渡辺真帆
1 ビール飲む喉の仏がうなづきぬ　山口冬人
1 外の風恋しや初秋の茜雲　大島めぐみ
1 断捨離と勿体ないこと敗戦日　真貝葉月
1 蔓梅擬講釈好きな花屋かな　井澤秀峰
1 いつからか電子が支配夏キッチン　水野宗子
1 晩年は自然に沿うて夏椿　長部多香子
1 ひとけなき恋人岬実玫瑰　田村美和子
1 黒揚羽よぎり野仏目を伏せる　山田一風
1 病窓へ黒揚羽舞いほころびぬ　大島めぐみ
1 白紙のやうな夕暮夏至の月　藤沢潮子
1 疫病下の暮らしあつさりはや秋に　柾木幸子
1 コロナウイルス少し飲みたるうがい水　大久保窓子
1 ゆるやかな湖畔の風に秋の蟬　安澤静尾
1 ひとつ跳んで考ふおかま蟋蟀　早津翠邦
1 向日葵に三脚立てて待つ夕べ　中村梨枝
1 風鈴に留守を任せて出掛けたる　古川よし秋
1 浜辺まで下る手摺や野萱草　星野祐子
1 木星を標に夏の散歩かな　佐藤　彬
1 日射病防ぐ術なく風呂に入る　倉又紫水
1 菊花展花の渦巻く疲れかな　風間靖彦
1 踊り出て笑はす妻は墓の下　武本松久
1 闇深く繁茂する草怖ろしき　伊藤亨子
1 枝豆と茄子漬送る東京へ　吉川さが子
1 夏薄暮何を語らう影二つ　倉又紫水
1 歩み寄る露草の色生くるいろ　刈田光児
1 雲遊ぶ空港レーダー燕の子　菅原あや子
1 虫鳴くや悔なき人生只ねがう　石黒英進
1 食細り二人で西瓜四半分　星野祐子
1 年寄りのすが目でにらむ敬老の日　大久保窓子
1 曝書する明治大正昭和の本　倉又紫水

大いなるウエスト周りつくつくし　猪又秀子
庭園の風みな集め夏館　菅原あや子
一人なりされどあたたか秋のれん　井澤秀峰
縞蛇の見ゆる菜園豊かなり　佐藤　彬
外灯に阿鼻叫喚の大取虫　小川久子
朝涼のコーヒー一杯百万両　米岡幸子
苦瓜食べコビット19寄せつけず　渡辺真帆
喪に籠もる若衆に届く祭笛　武本松久
八月や飢へも遠くにホカ弁当　真貝葉月
音もなく若き馬追裏口に　吉川さが子
爽やかやお裾分けですクレープを　石塚吉江

■第7回句会

順位	得点	作品	作者
①	15	原発へ地続き五里の茱萸真っ赤	袖山リェ
①	15	鶏頭のひだの奥より暮れゆけり	長部多香子
①	15	鮭を裂く通し土間より怒涛音	菅原あや子
④	14	異論ありさう末席の黒扇子	渡辺真帆
⑤	12	みな違ふ風を握りて冬木の芽	石塚吉江
⑤	12	土器土偶出でし里山柿日和	清水逍径
⑦	10	検温も旅仕度なり朝寒し	中村梨枝
⑧	9	自由とふ美しき音降る落葉道	今井愛子
⑨	8	自分史は昭和に戻り走馬灯	長部多香子
⑨	8	朱鷺高く秋の夕焼透き通る	小川久子
⑨	8	十段の稲架に透けたる一つ星	古川よし秋
⑨	8	わしわしと長靴のゆくねこじやらし	小林悦子
⑨	8	台座なき石仏秋の草の丈	藤沢潮子
⑭	7	かりそめの発心なれど天高し	八木　進
⑭	7	秋麗や嬰に摑まれし指一本	石黒英進
⑭	7	灯し消す紐の長さや残る虫	大久保窓子
⑭	7	菩提寺の甍に触るる雁のこゑ	米山節子
⑭	7	渡り鳥湯気高く上げ饅頭屋	小林悦子
⑭	7	健やかや空腹覚ゆ敬老日	藤沢潮子
⑭	7	十三夜鳥獣は戯画を抜けだせり	刈田光児
6		行く秋の際立つ白さ巡視船	水野宗子
6		潮騒も育ての親や甘藷掘る	佐藤　彬
6		人ごゑも無き故郷や威銃	井澤秀峰
6		この道は手ぶらで行こう曼珠沙華	吉川さが子
6		人生を持ち寄りて見る大花火	成保房子
6		空邃き轍次生家や小鳥来る	清水逍径
6		虫すだく命の重さ口々に	成保房子
6		木の果雨音の重さに日の暮るる	石塚吉江
6		魚野川鋼色へと冬隣	今井愛子
5		小鳥来る「病と仲良くなりなさい」	菅原あや子
5		佐渡一島つるべ落しに呑み込まる	袖山リェ
5		熊とほる引込線に錆の出て	山田一風

5 塗装する人夫に釣瓶落しかな　小川久子
5 古書古着捨ててすつきり畳替　武本松久
5 運動会くるくる仕上ぐ玉子焼　古川よし秋
5 全身で泣く嬰のなみだ秋澄めり　石黒英進
5 鍬を身に寄せて打たるる秋時雨　米山節子
5 山霧や日ごと身の内緊まりゆく　柾木幸子
4 千枚田刈られ傾く陽の軽さ　風間靖彦
4 手花火のこの世に残したる横顔　大久保窓子
4 句敵の体調憂ふ残暑かな　小熊千恵子
4 花鋏露の畑に夜を明かし　中村　侖
4 新米が届きて母に六分粥　山口冬人
4 下校児に手洗ひうがひ鵙高音　藤沢潮子
4 葱干すは疫病除けなり放心す　今井愛子
4 幼な子の言葉みぢかし衣被　安澤静尾
4 錦秋や遠心力を引き寄せて　田村美和子
4 鮭颪どこからも見ゆ五頭の峰　山口冬人
4 ぎつぎつと音立て止まる木の実独楽　水野宗子
3 芋の露畑一面の朝日かな　中村　侖
3 一草に風のひらめき秋の蝶　石塚吉江
3 声大き園児にメダル運動会　吉川さが子
3 体温計に秋冷の真顔向け　山田一風
3 安産を願ふ絵馬掛け神無月　小川久子
3 風音の変はれば忽と飛蝗消ゆ　井澤秀峰
3 秋の鯰泥動かさず波立てず　柾木幸子
3 秋の蚊のまた寄り来るもあはれなり　司　雪絵
3 絵本出て妖精遊ぶ良夜かな　風間靖彦
3 峰五つ透かして眠る雑木山　大久保窓子
3 焦っても寝てても一人地虫鳴く　米岡幸子
3 ご法度の注ぎ合うてをり神の留守　山田一風
3 十日ほど酬せと佐渡の柿便り　八木　進
2 悪さする子ら居て小鳥追ひ返す　武本松久
2 すとんと秋着るものを選る指迷う　米岡幸子
2 粧ひの山に留まる鳶の笛　猪又秀子
2 錦秋や琵琶湖の里の綴れ織　大島めぐみ
2 潟しぐる結びの硬き菱粽　渡辺真帆
2 秋じまひ今朝厨房の割烹着　古川よし秋
2 早稲刈られ越後平野のビンゴめく　星野祐子
2 傷梨は肥料袋に詰められて　中村梨枝
2 荒ぶる日安らぐ日あり秋桜　米岡幸子
2 くつきりと佐渡引き寄せて台風来　佐藤　彬
2 やや寒や靴下すこし厚くして　八木　進
2 今日は誰ぞの命日か帰り花　水野宗子
2 鎮座して主待つ猫こぼれ萩　猪又秀子
2 鉛筆派多き句会に秋の声　小熊千恵子
2 雀瓜ちやほやしつつ割りても見　渡辺真帆
2 地方紙に秋日の洩るる図書ロビー　猪又秀子
2 満月を人工衛星よぎりおり　倉又紫水
2 秋気澄む館や青磁馬上盃　司　雪絵

1 コスモスの海を見てゐる千切れ雲　田村美和子
1 「阿字」の子が翼をひろぐ秋北斗　早津翠邦
1 不揃ひが美小さきが美草の花　成保房子
1 初雪便り孫の背母を越すと云う　石黒英進
1 白鳥来る潟に休める羽温し　伊藤亨子
1 秋風裡濡れて愛しき生命線　刈田光児
1 牛乳の歯に凍みるより秋深き　倉又紫水
1 熊出没縄文人はいかがせむ　清水逍径
1 顔五つ寄せ潟の辺の雀瓜　司　雪絵
1 鬼蓮の茎の蛸足秋澄める　柾木幸子
1 駅裏の秋耕しづかに行きもどる　安澤静尾
1 躓いて顔より転びうそ寒し　小林悦子
1 林檎売り去りて一茶碑目に入る　武本松久
1 難病と言はれて遥か稲雀　菅原あや子
1 冬めくや一人の晩酌一夜干し　大島めぐみ
1 もてなしのうまさ新蕎麦コップ酒　長部多香子
1 学寮の斜光をつたふ祈り虫　早津翠邦
1 開きをる黄葉明りに子の便り　吉川さが子
1 野ばらの実未明の童話読み直す　井澤秀峰
サンダルをスニーカーにし大花野　星野祐子
団体戦没にし履行運動会　小熊千恵子
曼珠沙華咲いて咲いても老い巳まず　安澤静尾
ひやひやと越後日光階隠　米山節子
柚子一つ空の飾りの険やか　早津翠邦
妖怪の光を見しや秋の魚　田村美和子
女郎蜘蛛月の満ち欠け肥りゆく　風間靖彦
秋気かな『一握の砂』読みさしの　刈田光児
飽食の雀ら刈り田をほしいまま　伊藤亨子
郷愁を誘いているか赤蜻蛉　倉又紫水
イベントの開催緩和露寒し　中村　侖
母の亡き古里遠く秋桜　星野祐子
銅に栄えし鉱山や雁渡る　袖山リヱ
水遣りのお礼とダリヤ真っ赤か　中村梨枝
焦らされて咲けば焦らす秋明菊　伊藤亨子
輪作にたどりし五年芋煮汁　佐藤　彬
白鳥来コロナ禍ゆるみ音楽祭　大島めぐみ

■第8回句会

順位	得点	作品	作者
①	20	全身がバネ少年に寒明くる	水野宗子
②	19	セーターにふとポケットのない不安	小川久子
③	16	日の差して畳一枚分の春	山田一風
④	15	はるかなるものに猟犬耳を立て	藤沢潮子
⑤	13	まぶしさは刃物に似たり寒の水	山田一風
⑤	13	眉を引く鏡の奥を止まぬ雪	小熊千恵子
⑤	13	吊り下げし鮭の眼窩に闇迫る	風間靖彦

⑧ 11 炉火恋し祖父がきせるを三度打つ　長部多香子
⑧ 11 空の端のまだ濡れてゐて野水仙　早津翠邦
⑩ 10 マスクして仕上げの味は目で決める　成保房子
⑩ 10 圧雪を剥ぐや大地はぽつと息　清水逍径
⑩ 10 添削のペンの先より寒に入る　井澤秀峰
⑬ 9 少し嘘混じる詩を書き胼の指　水野宗子
⑬ 9 五体投地したくなるよな雪の嵩　米岡幸子
⑮ 8 朱の入りし文字もありたる古書揚げ　八木　進
⑮ 8 息災といふ宝物竜の玉　小林悦子
⑰ 7 この寒さ大声出してみたくなり　中村梨枝
⑰ 7 中天の寒月村を眠らせて　倉又紫水
⑰ 7 マスクして曇る眼鏡で見る世間　小川久子
⑰ 7 推敲の果てに捨てる句虎落笛　太田チェ子
⑰ 7 日矢差せば寒涛力ふっと抜く　菅原あや子
⑰ 7 女正月夫を待たせてゐて試着　藤沢潮子
6 転生の夫のこゑかも小鳥来る　長部多香子
6 マスクへはマスクの笑顔春近し　山田一風
6 風だけが棲みつく村や年の暮　長部多香子
6 節分の鬼なき堂の広さかな　安澤静尾
6 思い出をひとつ殖やして着ぶくれり　成保房子
6 雪疲れ傘寿の息を吸うて吐く　清水逍径
6 海鳴りや祖母の針目のちやんちやんこ　菅原あや子
5 雪折れのとどろきに村しづまれり　古川よし秋
5 春障子尻餅の嬰すくと立つ　米山節子

5 良薬の効きは確かや寒の水　中村梨枝
5 品書は女将の自筆蕪蒸　藤沢潮子
5 満山の霧氷となりて晴れ渡る　佐藤　彬
5 弥勒仏の御手たをやか春を待つ　清水美智子
5 キュッキュッとシンクを磨く大寒日　佐藤　彬
4 存分に淑気吐きたる明けの鐘　石黒英進
4 寒禽の声に禅林微動せり　袖山リヱ
4 換気の窓大きく開き鬼は外　今井愛子
4 初雀思ひの丈を話しなさい　清水逍径
4 漬物の鉢出す越後冬ごもり　太田チェ子
4 裏表手書きの賀状読み返す　星野祐子
4 塩麹に育つ香気や寒の月　柾木幸子
4 雪晒し雪の歓喜を唐辛子　中村梨枝
4 春立つや宙は希望の飛ぶところ　柾木幸子
3 なぜ生きる答えは問わず蜜柑むく　風間靖彦
3 呼ぶ声の川音に消え鳥帰る　石塚吉江
3 梅の香や忘れはしまい義母の恩　田村美和子
3 寒四郎駅の木椅子に凭れゐて　井澤秀峰
3 風を読む漁師の妻や春を待つ　水野宗子
3 雪のふはふは告別の人溜り　小林悦子
3 時々は独語交へて煮るのつぺ　小熊千惠子
3 暖かや切り株庭の指定席　大久保窓子
3 石切場の鎮まり切つて雪催　袖山リヱ
3 読み止しの文庫に置かれある蜜柑　米山節子

3 呉服屋の窓福助と福寿草　星野祐子
3 熊笹にひかり遊ぶや冬泉　清水美智子
3 吉兆の雲は天女か笹子鳴く　石塚吉江
3 永らへていつもの暮らしねぎま汁　太田チェ子
2 風花や不要不急の散歩径　小熊千惠子
2 音さへも失せ大雪の気配かな　真貝葉月
2 雪女の恪気電柱なぎ倒す　渡辺真帆
2 冬枯れや時短要請夜の街　中村　侖
2 雪国に住んで日射しのありがたし　小川久子
2 斑雪野に食みて空見る鳥百羽　安澤静尾
2 仮の歯の厚き裏側雪もよひ　小林悦子
2 炉縁に傷ありて榾木の崩る音　井澤秀峰
2 雪掻けば倍に積む夜を寝ねにけり　柾木幸子
2 コロナ除け寒九の水を喉で飲む　清水美智子
2 いつもの道小股で歩く寒四郎　吉川さが子
2 波の音ある日なき日の暖かし　大久保窓子
2 赤ちやんの仕種一つで初笑　中村　侖
2 子に嫁に仕へ上手の年の暮　真貝葉月
2 寒蜆一期一会のやうにかな　保坂季泉
2 喪の家の絵筆そのまま暖炉燃ゆ　吉川さが子
2 車駆る春日にリズム生れてゐし　石塚吉江
2 嘘ついて西国へ行く花季に　藤田隆雄
2 寒昴中のひとつが瞬きぬ　黒坂愛子
2 旅をして句会のできる春を待つ　中村　侖

2 アマゾンの箱来るを待つ春隣　八木　進
2 ゲシュタルト崩壊問はれ雪の花　田村美和子
1 目覚れば雪雪雪の迫りくる　黒坂愛子
1 ボン遥かベートーベン聴く小正月　大島めぐみ
1 荒地捨て仕事探しの冬帽子　武本松久
1 村中が雪の底なりマスク掛け　大久保窓子
1 首をかしげて人日のチューリップ　司　雪絵
1 雪の中まだ生きている松折れて　伊藤亨子
1 岩絵具めきてでこぼこ雪の道　佐藤　彬
1 人通る八十八夜の罠よけて　藤田隆雄
1 ふんばって茹蟹の眼の鉛色　米岡幸子
1 雪原と宙の接点彼岸此岸　刈田光児
1 おのずから合わす手ぢから初詣　石黒英進
1 振袖のお下がり次女の初写真　武本松久
1 雪の乱息を殺してゐる早寝　渡辺真帆
1 元日の拍手を打つ生命線　大島めぐみ
1 一言の詫び入る文や雪の夜　古川よし秋
1 寒波過ぎ去り稜線のあかね雲　黒坂愛子
1 ひよつとこもおかめもをりて春隣　山口冬人
1 粉雪は序奏兜の緒を締むる　米山節子
1 こもりいてストーブ漬けに食べて寝て　伊藤亨子
1 そこら辺まで人送る冬の月　成保房子
1 ひとすぢの深雪明かりや初電話　司　雪絵
1 あたたかしユマニチュードの談話室　田村美和子

1 亡き人の冬帽ゴスペルしみてくる　米岡幸子
1 晴れ間出て路地に数多のスノーダンプ　八木　進
1 薄つぺらな二通の封書春の雪　猪又秀子
1 佛恋う日もあり庭の雪垂　大島めぐみ
1 いつか行かん南国の絵の初暦　渡辺真帆
1 餅入りの雑炊でよし松の内　石黒英進
1 死んでいい齢して検診に年新た　伊藤亨子
1 葉隠りの白玉椿あふれしむ　早津翠邦
1 植え忘る球根青き芽の袋　今井愛子
1 落葉舞う輪廻転生限りなし　風間靖彦
1 雪山に蛙も熊も香具師と眠る　藤田隆雄
1 いつ果つる疫病の数や冬銀河　吉川さが子
絵文字入り謹賀新年Eメール　星野祐子
告ぐことのなく雪滑る寺の屋根　山口冬人
サイネリア優しき言葉探しをり　猪又秀子
八巻目の文春文庫読み初む　菅原あや子
湯婆抱き幼のこころ戻りたる　保坂季泉
松とりて再び戻る寒波かな　安澤静尾
人間の目のふたつある春愁　早津翠邦
立春の脱力感や隅の豆　今井愛子
どか雪の越の里より和紙届く　袖山リヱ
白世界水鳥密に唖み合い　刈田光児
冬夕焼続きし六十年のダイヤ婚　倉又紫水
初雀梢より翔つかくれんぼ　古川よし秋
モボの父形見も粋な冬帽子　真貝葉月
旅立つもさ迷ふ妻を初夢に　武本松久
雪降りつむ赤い花にも白い花にも　司　雪絵
五線譜に乱れなき虎落笛かな　山口冬人
土竜塚雪虫屯していたる　猪又秀子
日本海朝にアーチの虹の出て　倉又紫水
俳友や通信句会雪見舞　刈田光児
余寒なほアルバムにある青春よ　保坂季泉

■第9回句会

順位	得点	作品	作者
①	14	歩き出しさう新しき春の靴	水野宗子
②	13	まだ喜寿と思へば軽し畑打つ	今井愛子
③	11	はてしなき鎮魂の海春寒し	田村美和子
③	11	白鳥帰る空の無限を横切りて	米岡幸子
③	11	落札を手鉤で曳けり鱈の箱	古川よし秋
⑥	10	瞽女の列そのしんがりに雪女	風間靖彦
⑥	10	初蝶の好きな高さを戻りきぬ	山口冬人
⑥	10	山神の動く頃合ひ遠雪崩	清水逍径
⑥	10	天空はがらんどうなり残る鴨	清水逍径
⑥	10	仮縫ひの鏡中に春生まれけり	渡辺真帆
⑪	9	推敲に崩るる一句春浅し	長部多香子

⑪ 9 風花や捨てきれぬもの身ほとりに　米岡幸子
⑪ 9 白木蓮疵つきやすき少年期　今井愛子
⑭ 8 胼胝の手を仕事始めの衣に通す　藤田隆雄
⑭ 8 父の忌の後に母の忌木の根明く　米山節子
⑭ 8 ふきのたう食べて昨日のこと忘る　山口冬人
⑭ 8 ぐうたらもきつとゐるはず地虫出づ　早津翠邦
⑭ 8 雪解風箍の外れし山が鳴る　山口冬人
⑲ 7 せせらぎは母の懐水芭蕉　今井愛子
⑲ 7 木の根開く土にひしめく命抱き　小熊千恵子
⑲ 7 追憶にひたる一と刻雛と座す　大島めぐみ
⑲ 7 犬ふぐり夜空が置いていつたのね　柾木幸子
⑲ 7 天と地の音吸いつくし牡丹雪　風間靖彦
⑲ 7 メトロノームの律なる響き冴返る　袖山リヱ
6 畦川の饒舌雪解はじまりぬ　藤沢潮子
6 嘘一滴媚薬となりて春の宵　渡辺真帆
6 望郷や雛うつろなるまなこして　井澤秀峰
6 そろばんも論語も疎し冴返る　田村美和子
6 退寮の書籍の嵩や春動く　中村　侖
6 春風や水がひかりを抱擁す　早津翠邦
6 診断の脳の輪切りや冴返る　藤沢潮子
6 蒼穹に声つまづきて初雲雀　石塚吉江
6 待春や引出が噛む紐の端　米岡幸子
6 春隣り燃やされず又仕舞ふ文　長部多香子
6 春疾風空家に続く捨て畑　小熊千恵子
5 啓蟄やあきはじむ己が四肢　大島めぐみ
5 まだ二月もう二月かと見る暦　中村　侖
5 推敲のすゑ捨てし句や鳥雲に　小林悦子
5 揚がりつ落ちつ雲雀は空のヨーヨーだ　柾木幸子
5 木々芽吹く新車の色は空の色　中村梨枝
5 秘密なぞなくて二人や草の餅　井澤秀峰
4 啓蟄の風交はしゆく陸上部　袖山リヱ
4 春泥をピアスの男の子ひとっとび　成保房子
4 白鳥の嘴より光滴れり　菅原あや子
4 惣の芽を摘む指に棘罪と罰　八木　進
4 啓蟄や介護施設へつづく道　吉川さが子
4 雪囲解けて支柱のはづせぬ木　小林悦子
4 啓蟄や読点のなき文書くる　井澤秀峰
4 春ショール長くなりたる立ち話　保坂季泉
4 この木あの木息抜いてゐる雪解村　清水美智子
4 桜若葉遊具の象の鼻短か　真貝葉月
4 土塊に整ふ暮し馬鈴薯植う　柾木幸子
4 引く白鳥空の潮気は消えたるか（3・11）　清水逍径
4 陽の匂ひ土の匂ひや菊根分け　司　雪絵
4 平仮名の屋号を旗に梅まつり　水野宗子
4 雪吊解く縄と青空手繰りけり　古川よし秋
3 雛の日を過ぎしあられが作事場に　小熊千恵子
3 若き日の苦き思ひや蕗の薹　中村梨枝
3 上向けば元気が出るぞ春の星　小川久子

3 雪下のキャベツ掘りあげ子に持たす　古川よし秋
3 歯磨きで終るいちにち梅月夜　刈田光児
3 春一番赤いバケツに躓けり　渡辺真帆
3 狂いなく早春の風沖より来　石黒英進
3 人生はプラスマイナス藪椿　黒坂愛子
3 忍従の女が並ぶ雛の段　太田チェ子
3 反抗期サンダル履きの磯遊び　八木　進
3 聚楽第行幸図屏風春埃　菅原あや子
3 地祭の四隅に立つる今年竹　大島めぐみ
3 のんびりと自愛の日々や春深む　大久保窓子
2 なにかある不安鮟鱇つるされて　安澤静尾
2 山国は牛の自由や雪解風　佐藤　彬
2 広重の浮世絵たどりたし彼岸　司　雪絵
2 地のめぐみ土の恵みや花大根　米山節子
2 臘梅のただ一木のかをり満つ　清水美智子
2 帰るまで独り舞台よ合格子　袖山リェ
2 欅大樹澎湃として芽吹きけり　水野宗子
2 水槽に蝌蚪授業はみんなオンライン　藤沢潮子
2 人間の避ける三蜜鴨の群　成保房子
2 ハモニカに言はせる春の心地かな　長部多香子
2 蕗のたう言葉ひろげるやう覗く　小川久子
2 棒切れを杖に見に行く座禅草　大久保窓子
2 老年はじまる杖一本のあり処　刈田光児
2 積ん読のあつき埃を払う春

2 手土産はバタークッキー初雲雀　猪又秀子
2 暖かや寝過ぎの猫の大欠伸　星野祐子
2 風光るカーブミラーの中に池　小川久子
2 金北山の島影ゆるぶ彼岸潮　安澤静尾
2 囀やいささか傾ぐ板塔婆　米山節子
2 煤逃げやコロナで居場所見つからず　藤田隆雄
2 花冷えや墓じまひせる経の声　太田チェ子
2 ひと畝の借り主として耕せり　小林悦子
2 閉校の桜ちょっぴり遠慮がち　成保房子
1 親の目の中で遊ぶや寒雀　星野祐子
1 十重二十重こゑの甘ゆる百千鳥　早津翠邦
1 眼光も強音もここぞの猫の恋　石黒英進
1 掃出しの窓のカンバス桜二分　猪又秀子
1 独り居の文句言はれぬ大朝寝　保坂季泉
1 三月や拝む他なし弥勒仏　中村梨枝
1 月朧遠流の佐渡の波静か　風間靖彦
1 手袋を外し現金払出機　星野祐子
1 国立を受かり今夜は桜鯛　真貝葉月
1 春耕や五風十雨を一心に　刈田光児
1 剪定と言ふ枝折れの始末かな　山田一風
1 デジタルに振り回されて草萌ゆる　田村美和子
1 春炬燵空きたる席に誰を待つ　保坂季泉
1 白鳥の地球の状態確かめて　伊藤亨子
1 雪形にチャップリン像の道化かな　石塚吉江

妹に忠告されし牡丹の芽　黒坂愛子
籠城を生くる力や春告鳥　山田一風
女には良き世となりぬふきのとう　太田チェ子
半衿を替へて待ちをり花便り　真貝葉月
大試験週の過半は晴れマーク　佐藤　彬
都会に住む子とオンライン晦日蕎麦　藤田隆雄
松折れて梅も折れ福寿草咲く　伊藤亨子
雪吊りを解く人ほろと城公園　安澤静尾
銀座より春の苺や誕生日　吉川さが子
五輪塔ながむる空を鳥帰る　石塚吉江
桜まじ一直線に来るわらべ　山田一風
旋回のかもめの群や風光る　菅原あや子
時の気のひととせなりし囲ひ解く　清水美智子
ひとすぢの紅秘む白玉椿かな　司　雪絵
ガス栓の再度確認桜東風　猪又秀子
囀よいつもの場所にりんご片　佐藤　彬
同病を励ます電話春の虹　中村　侖
縄跳びの大波のどの風邪はやる　大久保窓子
彼岸くる風暖かくほとけきて　伊藤亨子
風雪に耐えほぐれんと梅蕾　石黒英進
蕗の薹ほつほつ見ゆる峠越え　吉川さが子
古き碑紅梅のひらひらと　黒坂愛子

物故会員（令和2年8月以降）

土屋信之（令和2年12月18日84歳でご逝去）

雪掻きの手に郵便を受け取りぬ
玄関は柩出す幅百日紅
立ち止まる所が深い秋の天
正座して真正面の水仙花
少しとは沢山のこと温め酒

田辺一也（令和2年12月28日86歳でご逝去）

種袋振りていのちの音を聞く
農継ぎて傘寿過ぎたる種子案山子
縁蔭に座して五体を溶かしをり
端居して吾亡き後の妻のこと
稲の花自分史となる農日誌

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

事務局短信

新型コロナウイルス感染防止のため定例総会、にいがた俳句フェスティバル、春のいちにち吟行、関東甲信越静ブロック連絡会議は中止となりました。

◇令和3年度定例総会（紙上会に）

4月8日に総会資料一式3枚を郵送して紙上総会としました。ご異議・ご意見もなく原案通り決定しました。

以下概略を報告。

①令和2年度行事、決算、監査、会員異動をそれぞれ報告

②令和3年度行事計画については

・定例総会は紙上にて実施

・第30回「にいがた俳句フェスティバル」は中止

・6月開催予定の関東甲信越静ブロック連絡会議は中止

・8月「現代俳句にいがた」第13号発刊

・9月　定例役員会

・いちにち吟行会

　春：長岡地区は中止

　秋：三条地区（未定）

・通信句会　「現代俳句にいがた」と事務局便りの発行時にご案内の予定

・事務局だよりの発行（5月、12月）

【役員の改選について】

任期は令和5年度定例総会までの2年

・顧　問　安澤静尾（新潟）

・会　長　清水逍径（三条）

・副会長　井澤秀峰（妙高）

　渡辺真帆（長岡）

・幹事長　佐藤　彬（新潟・事務局長）

・会計幹事　山口冬人（阿賀）

・会計監査　成海　靜（新潟）

　星野祐子（柏崎）

・幹　事　大島めぐみ（新潟）

　北村美都子（新潟）

　刈田光児（新潟）

　小林悦子（三条）

　清水美智子（三条）

　司　雪絵（三条）

　中村梨枝（三条）

　伊藤一二三（長岡）

　小熊千恵子（長岡）

　片桐和子（長岡）

　成保房子（長岡）

　藤沢潮子（長岡）

　米山節子（長岡）

　真貝葉月（柏崎）

　武本松久（柏崎）

　水野宗子（柏崎）

　古川よし秋（妙高）

　猪又秀子（糸魚川）

　八木　進（糸魚川）

◇通信句会について

会員同士の研鑽・親睦を目的として令和元年八月に第1回を開始しました。昨年発刊の第12号で第4回句会までを報告しました。以降の句会は左記のとおりです。

・令和2年7～8月第5回（40名参加）

・令和2年8～9月第6回（40名参加）

・令和2年10～11月第7回（39名参加）

・令和3年1～2月第8回（45名参加）

・令和3年3～4月第9回（43名参加）

・令和3年6～7月第10回（41名参加）

・令和3年7～8月第11回（実施中）

この句会も軌道に乗り順調に実施されております。第10回からは千円の会費で三回以上実施する予定です。なお、事務局の時間の都合で日程等に若干の変更がありうることをご了承ください。

◇新入会員をご紹介ください

会員減少が続いています。適任者を事務局までお知らせください。

編集後記

▼二年越しの新型コロナウイルスの感染が収まらず、どちら様も句会は何とか続けているものの、吟行会や大会が出来ず仕舞い。県の総会や俳句フェスティバルも二年続けて中止となった。鬼に笑われても来年こそはと願わずには居られません。

▼そんな中で東京オリンピックが始まりました。今回二度目の自国開催に巡り合えた世代の一人としては、いろいろありましたがやってくれて良かったと思います。無観客であろうと何であろうと、選手の努力が報われれば何より。メダルラッシュを期待しましょう。（山田一風）

▼七月の誕生日を期にドライブレコーダーを購入した。七十歳を過ぎ、遠出することもなく、こんな田舎では「あたり屋」の心配もないだろうと勝手に思い込み、取り付けを躊躇していた。

▼然しこんな世の中、何時どんな事が起きるかもしれず、ワイパー交換に行った序でに取り付ける事にした。それに市より一万円の補助があると言われ一も二もなくお願いをした。

▼然し乍ら、「ドライブレコーダー録画中・糸魚川地域の見守り協力車」のステッカーには抵抗があり、気恥ずかしく未だ車に貼る勇気がなく、そのままにしている。（猪又秀子）

▼逝く秋のわが恋唄は朱鷺挽歌―佐渡八十八ケ所巡拝の旅の途中、鷲崎で念願の齊藤美規先生のこの句碑に会うことができた。碑のある場所への経路が分らず迷っていたが、親切な地元の人の案内で行くことができた。管理する人もいないのだろうか、そこは夏草が茂っていて、先生を慕うものとしては少し寂しい気がした。

▼佐渡では自然のトキに会えることを楽しみにしていたが、一度だけ青田に降り立つトキらしいものを遠望できただけで、これも少々残念だった。

▼この旅の計画と本誌の校正作業が重なり、若干発行が遅れてしまったことをお詫びいたします。（八木　進）

編集委員

八木　進

猪又秀子

山田一風

現代俳句にいがた第13号

発行日　令和3年8月1日

発行所　新潟県現代俳句協会

発行者　清水逍径

編集代表　八木　進

協会事務局　佐藤　彬

〒950-2112

新潟県新潟市西区内野町六二六

☎〇二五-二六二-二七六一

印刷所　㈲内山印刷